慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	揚雄の文學觀
Sub Title	Literary view of Yang Xiong
Author	荻野, 友範(Ogino, Tomonori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.110, (2016. 6) ,p.45 (226)- 59 (212)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	冊子には前からの通しページあり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01100001-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

揚雄の文學觀

荻野　友範

一

周知のように、揚雄は、文學史上、思想史上、きわめて重要な人物である。文學史上でいえば、「蜀都賦」「甘泉賦」などの賦作品のみならず、「趙充國頌」「劇秦美新」など、計六十にもおよぶ著述が今日に傳えられ、六朝期の中國初の文學理論書である劉勰『文心雕龍』では「卿（司馬相如）・淵（王褒）より已前は、多く才を役して學を課せず。雄（揚雄）・向（劉向）以後は、頗る書を引きて以て文を助く。此れ取と與との大際にて、其の分は亂るべからざる者なり（自卿・淵已前、多役才而不課學。雄・向以後、頗引書以助文、此取與之大際、其分不可亂者也）」（才略篇）と評される文學者である。思想史上でいえば、『周易』を模した『太玄』、『論語』に倣った『法言』を著すなど、孔子にみずからを重ね合わせた思想家である。前漢末、文學史上、思想史上のいずれにおいても一つの畫期をなした人物として言い過ぎではないであろう。

しかしながら、この文學者と思想家の兩面を合わせ持つがゆえにであろうか、揚雄にはまだ解明されていない、または究明されなければならない課題も殘されているように思われる。その一つが、文學觀であると考える。これまでにも揚雄の文

學觀に關わる考察はなされてきている。[1] だが、それらの研究で示された文學觀を支える揚雄自身の思考構造は必ずしも明らかにはなっていないのではないだろうか。

こうした問題意識から、本稿では、主に賦に對する揚雄の言及から、揚雄の思考を讀み解き、その文學觀を形作る思考の一端を明らかにしていくこととしたい。[2]

二

これまで揚雄の文學觀は以下のように總括され、位置づけられてきた。

まず、林田愼之助『中國中世文學批評史』にはつぎのように記されている。[3]

兩漢魏晉の時代には二つの大きな辭賦論の系譜があって、一つは前漢の司馬相如、魏晉の曹丕・曹植・陸機・陸雲の現實的な效用を意識せずに、純粹文學の立場から虛構の表現美を娛しむ辭賦論であり、二つは前漢末の宣帝・揚雄、後漢の班固・蔡邕、それに西晉の左思・皇甫謐・摯虞の禮教の道義論的立場から、諷諫の意義づけをおこない、その社會的效用性を強調する辭賦論であり、兩者が政治と文學の問題をめぐって相い拮抗する狀態にある。

辭賦論という枠組みにおいて、漢代には「現實的な效用を意識せずに、純粹文學の立場から虛構の表現美を娛しむ辭賦論」と「禮教の道義論的立場から、諷諫の意義づけをおこない、その社會的效用性を強調する辭賦論」という二つの大きな系譜があり、揚雄の辭賦に對する見方を後者に位置づけている。

つぎに、古川末喜「賦をめぐる漢代の文學論」の要點をまとめるとつぎのようになる。[4]

①政治教化有效説……司馬遷・宣帝・班固

②政治教化無效説……宣帝を取り卷く宮廷人・明帝・王充・張衡

③政治教化有效説と無效説の中間に位置する説……揚雄・『漢書』藝文志「詩賦略」・蔡邕

「政治教化」とはいわゆる「諷諭説」のことを意味する。①が「賦に諷諫、教化の效用がある」とする立場、②が「賦に

は諷諫、教化の作用はない」とする立場、③が「辭賦作家の諷諫の主觀的意思を認めつつも、現實的效果がない」とする立場であり、この諷諭説をめぐる議論を漢代の賦論の第一の特徴とする。また、この諷諭説以外に「賦の職人藝」に起因する議論として、「賦は美麗かつ宏大であるという賦の風格に關する意見」「類語辭書的な賦の敍述法に言及したもの」「作家側からの吐露」「漢賦俳優説」などをあげ、これを漢代の賦論の第二の特徴とする。

これによれば、揚雄は、③の「辭賦作家の諷諫の主觀的意思を認めつつも、現實的效果がない」として、「政治教化有效説と無效説の中間に位置する説」をもった人物とされている。

漢代の文學觀を見通した兩者の見方には、細部においてはやや出入りがあるものの、前者では「禮教の道義論的立場から、諷諫の意義づけをおこない、その社會的效用性を強調する」とし、後者では「政治教化」として、表現こそ異なるが、この時期の文學觀を形成する一つの軸に「諷諭説」が据えられていることは共通している。諷諭説といえば、儒家思想の中核を擔う考え方であるといっても過言ではない。そして、揚雄に對する見方に限ってみても、諷諭説を持つとすることでは兩者とも一致し、とくに、後者では「辭賦作家の諷諫の主觀的意思を認めつつも、現實的效果がない」としている點は注目しておいてよい。

兩研究で導き出された結論にとくに異論があるわけではない。むしろ、漢一代の文學全體を見通した的確な見方といえる。しかし、揚雄のいかなる思考が「禮教の道義論的立場から、諷諫の意義づけをおこない、その社會的效用性を強調」し、「政治教化有效説と無效説の中間に位置する」文學觀として結實したのか、この點についてもう一歩踏み込んで檢討してみることとする。

三

揚雄の諷諫説に基づく賦への見方は、主に以下に掲げるものに求められる。[5]

まず、『法言』吾子篇に見えるつぎの一節である。[6]

或ひと問う、「吾子は少くして賦を好めり」と。曰く、「然り。童子は彫蟲篆刻す」と。俄而にして曰く、「壯夫は爲さざるなり」と。或ひと曰く、「賦は以て諷すべきか」と。曰く、「諷か。諷すれば則ち已めん、已めざれば、吾れ恐らくは勸むるを免れざらん」と。或ひと曰く、「霧縠の組は麗し」と。曰く、「女工の蠹なり」と。……

或問「吾子少而好賦」。曰、「然。童子彫蟲篆刻」。俄而、曰、「壯夫不爲也」。或曰、「賦可以諷乎」。曰、「諷乎。諷則已、不已、吾恐不免於勸也」。或曰、「霧縠之組麗」。曰、「女工之蠹矣」。……

賦とは、子どもが「彫蟲篆刻（難しい書體を學ぶこと）」するようなものであり、立派な大人は「爲さざる」ものとし、その理由を「諷」の效果を期待したとしても、その期待とは裏腹に、結果的に「勸」することになってしまうからであるという。續けて、比喩的にこれとは異なった角度から、霧のように薄くて輕い絹織りは「麗（美しい）」であるが、そのための手間暇は機織り作業をする女性を甚だしく煩わせるので害となるとする。外形美である「麗」を作り上げる過程の弊害を指摘する。

こうした揚雄の立場は、つぎの一節でよりはっきりと表明される。

雄以爲えらく賦なる者は、將に以て風せんとするなり、必ず類を推して言い、麗美の辭を極め、閎侈鉅衍、人をして加うる能わざらしむるを競うなり。既に乃ち之を正に歸さんとするも、然れども覽る者已に過てり。往時武帝神仙を好み、相如大人の賦を上り、以て風せんと欲するも、帝反って縹縹として雲を陵ぐの志有り。是に繇りて之を言えば、賦の勸めて止めざること、明らかなり。又た頗る俳優淳于髡、優孟の徒に似、法度の存する所、賢人君子の詩賦の正に非ざるなり、是に於いて輟めて復た復さず。（『漢書』揚雄傳下）

雄以爲賦者、將以風也、必推類而言、極麗靡之辭、閎侈鉅衍、競於使人不能加也。既乃歸之於正、然覽者已過矣。往時武帝好神仙、相如上大人賦、欲以風、帝反縹縹有陵雲之志。繇是言之、賦勸而不止、明矣。又頗似俳優淳于髡、優孟之徒、非法度所存、賢人君子詩賦之正也、於是輟不復爲。

揚雄の自作といわれる『漢書』揚雄傳の一節である。[7] 賦は本來、「風（諷）」しようとするものであるが、司馬相如が武帝を

「風（諷）」しようとしたにもかかわらず、逆効果を生む結果となってしまったことが記され、さきの吾子篇で説かれた内容の實例が示されている。この一節には、「風（諷）」以外にも賦の特徴が述べられ、とくに、「麗美の辭」とは、さきの「霧穀の組は麗し」と同じく、賦のもつ言語表現上の美しさをいっているものと思われる。

そして、『法言』吾子篇には、つぎのような記載も見える。

或ひと問う、「景差・唐勒・宋玉・枚乘の賦や、益ありや」と。曰く、「必ずや淫ならん」と。「淫なれば則ち奈何」と。曰く、「詩人の賦は麗しく以て則あり、辭人の賦は麗しく以て淫す。如し孔氏の門賦を用うれば、則ち賈誼は堂に升り、相如は室に入らん。其の用いざるを如何せん」と。

或問、「景差・唐勒・宋玉・枚乘之賦也、益乎」。曰、「必也、淫」。「淫、則奈何」。曰、「詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫。如孔氏之門用賦也、則賈誼升堂、相如入室矣。如其不用何」。（『法言』吾子篇）

本稿の關心に引き寄せて、推測される當時の狀況や修辭の面から詳しく檢討していくと、この一節は相當に重要な意味を持つように思われる。

第一に、「詩人」と「辭人」の對比である。「詩人」という語は、「九辯」に「竊に詩人の遺風を慕い、願わくは志を素餐に託せん（竊慕詩人之遺風兮、願託志乎素餐）」（引用者注――傍點は引用者による。以下同じ）とあるのがはじめて見える例のようである。この「九辯」の例をはじめとして、漢代における「詩人」の用例を調査すると、ほぼすべてが『詩經』との何らかの關連性をもって「詩人」の語が使用され、ほぼ例外なく「『詩經』の詩篇の作者」を意味している。「九辯」では、「ひそかに『詩經』の詩人が「彼の君子は、素餐せず（彼君子兮、不素餐兮）」（『詩經』魏風・伐檀）といったのを思い慕い、どうか功なくして祿を食まないようにしたい」という意味であることからこれにあたるし、ほかにもたとえば、宣帝（前七三～前四九）期の桓寛『鹽鐵論』散不足篇には、賢人や君子が眞心をもって困難に立ち向かう姿を、「此れ詩人の傷みて而して作り、比干・子胥の身を遺れ禍を忘るる所以なり（此詩人所以傷而作、比干・子胥遺身忘禍也）」として、このあとに『詩經』小雅・節南山を引く。また、班固『漢書』匈奴傳上にはつぎのようにある。

穆王の孫懿王の時に至り、王室遂に衰え、戎狄交も侵し、中國を暴虐す。中國其の苦しみを被むり、詩人始めて作りて、疾みて之を歌いて、曰く、「室も靡く家も靡きこと、猃允の故なり」「豈に日に戒めんや、猃允孔だ棘なり」と。懿王曾孫宣王に至り、師を興し將に命じ以て之を征伐す、詩人其の功を美大して、曰く、「薄に猃狁を伐ち、太原に至れり」「車を出して彭彭たり」「彼の朔方に城く」と。是の時に四夷賓服して、稱して中興と爲す。

至穆王之孫懿王時、王室遂衰、戎狄交侵、暴虐中國。中國被其苦、詩人始作、疾而歌之、曰、「靡室靡家、猃允之故」「豈不日戒、猃允孔棘」。至懿王曾孫宣王、興師命將以征伐之、詩人美大其功、曰、「薄伐猃狁、至於太原」「出車彭彭」「城彼朔方」。是時四夷賓服、稱爲中興。

「詩人」の語が二箇所に見え、前者では、戎狄の侵入に苦しめられるさまを痛んで詩人が詩を作ったとして『詩經』小雅・采薇を引く。後者では、戎狄を征伐した功績を稱えて詩人が詩を作ったとして『詩經』小雅・六月ならびに小雅・出車を引く。

當時の「詩人」の語が「『詩經』の詩篇の作者」を指すことは、諸注釋書において自明のこととして扱われているが、當時の「詩人」が單なる一般名詞としての詩人とは異なることがこれらの例からあらためて確認できるだろう。

一方、「辭人」の語は、『法言』以前の用例を見出すことができないが、『文心雕龍』では頻繁に使用され、「賦作家」という意味で定着している。[8]『文心雕龍』以前では『文章流別論』が本箇所を引く以外に、

此れ膏粱の常疾に因りて以て勸を匡くると爲し、甚泰の辭有りと雖も其の諷諭の義沒せざるなり。其の流れ遂に廣く、其の義遂に變わり、率ね辭人淫麗の尤有り。[9]

此因膏粱之常疾以爲匡勸、雖有甚泰之辭而不沒其諷諭之義也。其流遂廣、其義遂變、率有辭人淫麗之尤矣。

と記しており、これも賦作家を意味している。

これらは、いずれも『法言』以降の例であり、語義を確定するうえで必ずしも最良な證據とはできないものの、本箇所の前後の文意から推しても、「賦作家」以外を指すことはなかなか想定しにくいことから、「賦作家」を指すものと判斷してよ

いであろう。

以上のことから、「詩人」は「『詩經』の詩篇の作者」を、「辭人」は「賦作家」を指し示していると考えて間違いないだろう。

第二に、本箇所で四度用いられている「賦」の語の理解である。つまり、「①景差・唐勒・宋玉・枚乘の賦」「②詩人の賦」「③辭人の賦」「④孔氏の門に賦を用う」である。諸先行研究によれば、ここにいう「賦」はいずれも文體としての賦と理解しているように見受けられる。[19] ところが、そのように理解すると、今日から考えられる當時の實態にそぐわず、全體の文意が必ずしも滿足に理解できないことに氣づく。①の景差・唐勒・宋玉・枚乘らの「賦」と、④の孔子の學派で用いることを假定したときの「賦」は文體としての賦と理解できるとしても、「②詩人の賦」と「③辭人の賦」を完全に文體としての「賦」と理解すると、②は『詩經』の詩篇の作者が「賦」という文體の作品を作ったことになる。だが、言を費やすまでもなく、『詩經』の詩篇の作者が賦作品を作った事實があったかといえば、それは確認できない。「詩人」が『詩經』の詩篇の作者を指している以上、その「詩人」とは、實在するにせよ、架空であるにせよ、『詩經』に收錄される詩篇を著した人のことをいっているのであって、それとは別に賦作品を著しているというのではないはずである。

そこで、「賦」の含意に焦點をあてると、『漢書』藝文志・詩賦略には「不歌而誦謂之賦、登高能賦可以爲大夫」という一句が見える。[11] ここに見える二つの「賦」の語について、程千帆「先唐文學源流論略（二）」は、「抑揚をつけて朗誦する（「諷誦」）」こととする。[12] すると、この句は「歌わずして而して誦する之を賦すと謂い、高きに登りて能く賦すは以て大夫爲るべし」と訓讀できる一句となる。つまり、賦という文體を指しているのではなく、「賦す」という表現行爲自體と解釋しているのである。

これに基づいて考えるならば、②③の「賦」の語を文體としての賦と理解する必要は必ずしもなく、むしろ、「賦す」という表現方法自體と理解するほうが理にかなっており、文意も實態と齟齬なく理解できる。したがって、本箇所に見える四つの「賦」とは、「賦」の語が示す「賦す」という表現方法自體の意味と、その表現方法が積み上げられて形作られた「賦」

という文體の意味を巧みに用いながら、賦の本質ならびに效果、そして賦作家への評價を示しているのである。

第三に、景差・唐勒・宋玉・枚乘・賈誼・司馬相如という六人の賦作家を取り上げるとともに、それに關わって、「益」「麗」「則」「淫」や比喩的に「升堂」「入室」などと評していることである。文體としての賦をめぐって、その出來に對する總合的評價として、景差・唐勒・宋玉・枚乘の賦が諷諭説に基づいて「益」か否かの問いにはじまり、四者（景差・唐勒・宋玉・枚乘）の賦の出來への總合的評價は「淫（「益」との對應でいうならば「不益」あるいは「非益」）」となる。賈誼・司馬相如の賦は、『論語』先進篇の「子曰く、「由の瑟、奚爲れぞ丘の門に於いてせん」と。門人子路を敬せず。子曰く、「由や堂に升れり。未だ室に入らざるなり」と。（子曰、由之瑟、奚爲於丘之門。門人不敬子路。子曰、由也升堂矣、未入於室也）」を踏まえて、「如し孔氏の門賦を用うれば、則ち賈誼は堂に升り、相如は室に入らん」として、比喩的かつ相對的な表現で、賦の出來では、司馬相如がもっともすぐれ（「入室」）、賈誼がそれに次ぐ（「升堂」）ものと評價している。[13] また、「賦す」という表現方法をめぐっては、「詩人」のそれは言語修辭表現の面では「麗（美しく）」でありなおかつ内容の面では「則（過不足ない）」、「辭人」のそれは「麗」でありかつ内容の面で「淫（行き過ぎ）」とする。[14]

以上のことから、本箇所の揚雄の發言をまとめると、「景差・唐勒・宋玉・枚乘の賦の出來は「淫」であり、『詩經』の詩篇の作者の賦し方は表現が美しく、内容も過不足ないが、賦作家の賦し方は表現は美しいが、内容が行き過ぎたものとなる。かりに、孔子の學派で賦を教化の手段とするならば、司馬相如はもっともすぐれており、賈誼はそれにつぐであろうが、賦を教化の手段としていないのだからいたしかたない」となる。

このように、揚雄は諷諭説に基づいて賦には諷諭が發揮されてもたらされる效果（「益」）、いわば儒家的思考に基づく社會的有用性が期待できないとしながら、賈誼や司馬相如の賦を高く評價するのみならず、評價にあたっては「益」「麗」「則」「淫」など基準を示している。つまり、諷諭説に基づいて賦の否定的な側面を指摘する一方、賦が本來的にもつ言語表現上の美しさ（「麗」）は肯定的に捉えようとする態度も見える。

このような相矛盾するような態度の根底にはいかなる思考が存在するのであろうか。「詩人」に匹敵する最高の評價が與

えられている司馬相如への言及をもう少したどってみよう。

長卿の賦人間從り來たるに似ず、其の神化至る所か。大諦能く千賦を讀めば、則ち能く之を爲す。諺に云う、「伏して象神を習う、巧みなる者は習う者の門に過ぎず」と。（揚雄「與桓譚書」[15]）

長卿賦不似從人間來、其神化所至邪。大諦能讀千賦、則能爲之。諺云、「伏習象神、巧者不過習者之門。」

司馬相如の賦が人間技ではなく、神がかり的な領域に達しているとして、さきの例と同様に、司馬相如の賦に對して最上ともいえる評價を示している。

揚雄が司馬相如を慕っていたことは諸書に記載が見え、有名なところであるが、揚雄は司馬相如を慕い、評價しただけではなく、みずからが司馬相如に比肩しうる存在であるかのような記述も見える。

成帝之（引用者注――揚雄作の「縣邸銘」「玉佃頌」「階闥銘」「成都城四隅銘」）を好み、以て相如に似たりと爲し、雄遂に此を以て外に見ゆるを得。此の數者は、皆な都水君（引用者注――劉向を指す）常て見るなり。（揚雄「答劉歆書」[16]）

成帝好之、以爲似相如、雄遂以此得外見。此數者、皆都水君常見也。

孝成帝の時、客に雄の文相如に似たりと薦むる者有り。（『漢書』揚雄傳上所載の「甘泉賦序」）

孝成帝時、客有薦雄文似相如者。

いずれも揚雄自身が成帝に召され、仕えることになった理由に自身の著作が司馬相如に酷似していることをあげている。兩例とも揚雄自身のことばとされることから、單に揚雄による司馬相如への敬慕の念というにとどまらず、司馬相如を引き合いに出して、間接的にみずからの著作の出來に最上の評價を下しているとも解釋できる。

このように、敬慕の對象として重ね合わされ、その評價によってみずからを暗に高く評價するかのように言及される司馬相如は、つぎのようにも評されている。

淮南の説の用、太史公の用に如かざるなり。太史公は、聖人も將に取ること有らんとす。淮南は、取ること鮮からんのみ。必ずや、儒か。乍ち出で乍ち入るは、淮南なり。文麗にして用寡きは、長卿なり。多く愛して忍びざるは、子長な

り。仲尼の多く愛するは、義を愛するなり。子長の多く愛するは、奇を愛するなり。（『法言』君子篇）

淮南説之用、不如太史公之用也。太史公、聖人將有取焉。淮南、鮮取焉爾。必也、儒乎。乍出乍入、淮南也。文麗用寡、長卿也。多愛不忍、子長也。仲尼多愛、愛義也。子長多愛、愛奇也。

「淮南」（『淮南子』）、「太史公」（『史記』）、仲尼、司馬相如を取り上げ、「用」か否か、「取」るべきであるか否かの點から對比し、簡潔に論評する。「用」という觀點から、相對的に『淮南子』は『史記』に劣る。司馬相如には、「麗」と「用」の觀點から、「麗」であるが、「用」の面には缺けるという。「麗」、つまり、言語修辭表現における美しさについては、積極的に認めようとする半面、「用（有用性）」の缺如を指摘するのである。

揚雄は、賦を主とする文學に對して、それらが目指すべき最終目標を「益」という語に示されるものにおいた。そして、「益」なるものを實現するには、内容面における「則」や「用」と同時に、表現面における「麗」を必要不可缺なものとしていることが明らかとなった。とりわけ、後者の言語修辭表現上における「麗」への強い認識と追求があったといえる。

また、揚雄の司馬相如への自己投影からは、揚雄自身が「麗」的な要素は十分に持ちあわせているものの、「則」や「用」的な要素にいまだ不足しているという、一種の批判的自己認識もうかがえる。

四

揚雄は、「益」を文學を評價するにあたっての判斷基準としていた。同時に、賦を主とする文學には言語修辭表現における美しさである「麗」をも求め、それを強く志向する態度が顯著であった。揚雄自身、儒家的思考がきわめて強いことは、彼の主張や著述のあらゆる面に現れており、あらためて述べるまでもないが、儒家の經典に對してはいかなる態度を示しているのか。揚雄の「五經」觀を檢討してむすびにかえることとする。

中國史上、「五經」という語がはじめて使用されるのは揚雄『法言』においてとされる。[17] このことは、揚雄の生きた時期

に、儒家の経典観ないしは儒家の経典を取り巻く環境になんらかの大きな變化が起こり、それを揚雄が敏感に感じ取り、記述したことを示唆するが、ここではそれには觸れず、揚雄の経典観を見ていこう。

或ひと問う、「君子は辭を尚ぶか」と。曰く、「君子事を之れ尚しと爲す。事辭に勝れば則ち伉、辭事に勝れば則ち賦、事・辭稱わば則ち經。言うに足り容うるに足るは、德の藻なり」と。

或問、「君子尚辭乎」。曰、「君子事之爲尚。事勝辭則伉、辭勝事則賦、事・辭稱則經。足言足容、德之藻矣」。（『法言』吾子篇）

内容である「事」と表現である「辭」のバランスにおいて、内容が表現に勝れば「伉」、表現が内容に勝れば「賦」、内容と表現のバランスがほどよく調和していれば「經」、すなわち經典であるという。「賦」と「經」とが對比的に取り上げられ、經典といえども、ただ單に内容のみを追求するのではなく、表現の面をも重視する態度が見て取れる。つまり、「經」にも「賦」に共通する要素を積極的に認めようとするのである。

類似した考え方は、ほかにも散見される。

或ひと曰く、「良玉は彫らず、美言は文らずとは、何の謂ぞや」と。曰く、「玉彫らずんば、璵璠器と作らず。言文らずんば、典謨經と作らず」と。

或曰、「良玉不彫、美言不文、何謂也」。曰、「玉不彫、璵璠不作器。言不文、典謨不作經」。（『法言』寡見篇）

堯・舜の政治を記した「典謨」（『尚書』「堯典」「舜典」「大禹謨」「皐陶謨」）でも、言語表現が「文」られていなければ經典として存立しえないという。

聖人は、質を文る者なり。車服以て之を彰らかにし、藻色以て之を明らかにし、聲音以て之を揚げ、『詩』『書』以て之を光す。……

聖人、文質者也。車服以彰之、藻色以明之、聲音以揚之、『詩』『書』以光之。……（『法言』先知篇）

「質」とされた「本質」を「文」ってこそ、聖人であるとする。

或ひと問う、「君子は言えば則ち文を成し、動けば則ち德を成す。何を以てぞや」と。曰う、「其の中に弸ちて外に彪あるを以てなり。般の斤を揮い、羿の矢を激す。君子言わず、言えば必ず中る有るなり。行わず、行えば必ず稱う有るなり」と。（『法言』君子篇）

或問、「君子言則成文、動則成德、何以也」。曰、「以其弸中而彪外也。般之揮斤、羿之激矢。君子不言、言必有中也。不行、行必有稱也」。

君子は、口から發せられたことばそれ自體がすでに「文」であるという。いずれも「文（かざる、あや）」の語が用いられているものの、「麗」と志向する方向性は同じく、言語修辭表現上の美しさを指している。

このように、儒家の經典であっても、また、聖人・君子であってもそのことばが表現のうえでは美しく飾られたものであるというのは、さきの賦が本來的に美しいものであるとされたことに通じる。賦に對して求められていた志向が、經典にも向けられているのである。そうであるからこそ、揚雄の目に「五經」は、つぎのように映ったのだった。

或ひと問う、「五經は辯有りや」と。曰く、「惟だ五經のみ辯なりと爲す。天を説く者は『易』より辯なるは莫く、事を説く者は『書』より辯なるは莫く、體を説く者は『禮』より辯なるは莫く、志を説く者は『詩』より辯なるは莫く、理を説く者は『春秋』より辯なるは莫し。斯を捨てては、辯も亦た小なり」と。

或問、「五經有辯乎」。曰、「惟五經爲辯。説天者莫辯乎『易』、説事者莫辯乎『書』、説體者莫辯乎『禮』、説志者莫辯乎『詩』、説理者莫辯乎『春秋』。捨斯、辯亦小矣」。（『法言』寡見篇）

「五經」こそが、「淫」ではなく、「益」であり、森羅萬象を雄辯に語りえるものだったのである。

本稿で考察した揚雄の文學觀は、社會的有用性を意味する「益」という語に集約される。これはいうまでもなく、儒家的文學觀の範疇に屬するものであり、その中心を擔う考えにほかならない。揚雄はそれにのみ盲從したかといえば、そうではない。言語修辭表現上の美しさを社會的有用性を擔保する必要不可缺な要素としてとらえ、そしてそれを強く求めるのである。

有用性と言語修辭表現上の美しさという二つの志向は、ひとり賦のみに求められたものではなく、「五經」にも同様に求

められるものであった。だが、この二つの志向の両立は、賦においては實現されえない理想として潰え、「五經」でのみ實現可能なものと認識された。そこに見える揚雄の「麗」や「文」への志向は、「五經」でのみではなく、「賦」においても「五經」と同質の美しさが志向され、體現できそうなものとして認識されていたことは特筆すべきことであろう。

注

（1）岡村繁「揚雄の文學・儒學とその立場」（『中國文學論集』四、一九七四年）は、揚雄の生涯からその文學・儒學とそれに基づく立場を考察している。

（2）この時期の主要な文學形式の賦や辭を總稱して「辭賦」の語を用いることがよくあるが、本稿ではこの語を使用しない。なぜなら、一つに「辭賦」の定義を確定しにくいこと、二つに本稿では賦や辭に限定されない、揚雄によって表現され、表明されたもの全體を視野に入れていることなどから、「辭賦」よりも廣い意味の語として、便宜的に「文學」を用いる。タイトルを「文學觀」とするのもこうした理由からである。

（3）林田愼之助『中國中世文學批評史』「第二章　魏晉時代の文學思想」「第一節　兩漢魏晉の辭賦論に流れる文學思想――左思、摯虞の場合――」創文社、一九七九年。

（4）古川末喜「賦をめぐる漢代の文學論」『中國中世文學研究』三七、二〇〇〇年。

（5）前掲、岡村繁「揚雄の文學・儒學とその立場」では、「前漢末に至り、辭賦を評價する際の基準として、揚雄が必要以上に「諷諫」を強調しはじめるのは、恐らく當時の宮廷で特に劉歆らにより高い評價を受けはじめた古文學の『毛詩』の影響によるものであろう。「諷諫」主義は、當時の詩經四家の中でも特に『毛詩』が強調するものであった」とする。

（6）汪榮寶撰『法言義疏』（中華書局、一九八七年）による。以下、同じ。

（7）『漢書』揚雄傳所收「揚雄自序」については、嘉瀨達男「『漢書』揚雄傳所收「揚雄自序」をめぐって」（『學林』二八・二九、一九九八年）に詳しい。

(8) 「是を以て後來の辭人は、英華を采摭す（是以後來辭人、采摭英華）」（正緯篇）、「而れども辭人の遺翰に、五言を見る莫し（而辭人遺翰、莫見五言）」（明詩篇）、「近代より辭人は、率ね詭巧を好む（自近代辭人、率好詭巧）」（定勢篇）、「昔詩人の什篇は、情の爲にして文を造る。辭人の賦頌は、文の爲にして情を造る（昔詩人什篇、爲情而造文。辭人賦頌、爲文而造情）」（情采篇）、「炎漢盛んなりと雖も、辭人夸毗して、詩刺の道喪ぶ（炎漢雖盛、而辭人夸毗、詩刺道喪）」（比興篇）、「近代の辭人は、率ね猜忌多し（近代辭人、率多猜忌）」（指瑕篇）、「施いて孝惠に及び、文景に迄り、經術頗る興れども、辭人は用いらるること勿し、賈誼抑えられ鄒枚沉むこと、亦た知るべきのみ。……爰に漢室より、成哀に至るに迄び、世の漸むこと百齡にして、辭人は九變すと雖も、大抵歸する所は、『楚辭』を祖述す（施及孝惠、迄于文景、經術頗興、而辭人勿用、賈誼抑而鄒枚沉、亦可知已。……爰自漢室、迄至成哀、雖世漸百齡、辭人九變、而大抵所歸、祖述『楚辭』）」（時序篇）、「古來の辭人、代を異にし武を接ぎ、莫不參伍して以て相い變じ、因革して以て功を爲さざるは莫し（古來辭人、異代接武、莫不參伍以相變、因革以爲功）」（物色篇）、「而れども聖を去ること久遠にして、文體解散す。辭人奇を愛して、言は浮詭を貴び、羽を飾りて尚お畫き、鞶帨に文繡す（而去聖久遠、文體解散、辭人愛奇、言貴浮詭、飾羽尚畫、文繡鞶帨）」（序志篇）と、計十一例見える。

(9) 『藝文類聚』五十七ならびに『太平御覽』五百九十に見える。

(10) 鈴木喜一『法言』（「中國古典新書」、明德出版社、一九七二年）では「古詩の作者たちのものした賦は、……」、田中麻紗巳『法言　もう一つの「論語」』（「中國の古典」、講談社、一九八八年）では「古代の詩人の賦は、……」とする。なお、『法言』の理解にあたっては兩書を參考にした。

(11) 班固『漢書』（中華書局、一九六二年）による。

(12) 程千帆「先唐文學源流論略（二）」、『武漢師範學院學報』一九八一年第二期。

(13) 嘉瀨達男「『法言』の表現――經書の援用と模倣――」（『學林』三六・三七、二〇〇三年）によれば、『法言』が『論語』をそのうちに含む經書の經文を用いる際には二つに用法に大別でき、「一つは經書の語や文をそのまま拔き出して文中に用いる方法であり、もう一つは經書の句法だけを用いる方法」があるという。本節はもちろん後者にあたるが、この場合は單なる句法のみを用いているのではなく、その構造がもたらす意味的效果をも援用しているといえよう。

(14) 「〈麗〉とは、文學の形式面での美しさを意味し」、主に「文學作品における言葉の美しさを意味している」（『中國美學範疇辭典』第二冊、大東文化大學人文科學研究所、二〇〇四年）、「〈淫〉とは儒家が禮義の規範と〈中和〉の原則に合致しない文學や藝術作品を排斥したことば」（『中國美學範疇辭典』第四冊、大東文化大學人文科學研究所、二〇〇七年）とあり、參考になる。

また、「淫」に關する類似の例として、『法言』吾子篇に、「或ひと曰く、「女に色有り、書にも亦た色有りや」と。曰く、「有り。女は華丹の窈窕を亂るを惡むなり、書は淫辭の法度を淈るを惡むなり」と（或曰、「女有色、書亦有色乎」。曰、「有。女惡華丹之亂窈窕也、書惡淫辭之淈法度也」）」と見える。

(15) 張震澤校注『揚雄集校注』（上海古籍出版社、一九九三年）による。

(16) 前掲、『揚雄集校注』による。

(17) 福井重雅『漢代儒教の史的研究――儒教の官學化をめぐる定説の再検討――』、「汲古叢書」六〇、汲古書院、二〇〇五年。